

取りあって泣きぐずれた。

十六日、張家口から北京へ向かう無蓋車に雨が容しやなく降りそそぎ、全身びしょぬれになった。雨がやめば日照りで、乳幼児は日射病、赤痢、疫病も続出した。死亡すれば、その駅付近に埋められた。

夜になると砲弾の音でほとんど眠れない。やっと北京に着き、日本人学校に収容された。北京から天津へトラックに乗せられ、振りおろさんばかりだった。幾多辛酸難苦の末、やっと天津の日本染料工場に収容された。

ここで約三か月を過ごした。

十一月末、天津からアメリカの貨物船に乗せられた。船中では、アメリカ兵（黒人も）に荷物を点検され、私は時計、指輪等を没収されてしまった。私どもは船底に押しこまれ、傷痍軍人、手足を失った看護婦さん達も多く、正視するに忍びないありさまだった。便所には集団でいった。船足が遅く、船酔いになり、子ども達は伝染病になり、死亡する。遺体に重石をしぼりつけ、海底に沈められた。その母親は、列車の中で疫病で一人亡くし、船中でジフテリアで一児を失い、ご主人は砲弾で死亡し

たという悲運の方だった。

四日日、やっと博多港に入港し、祖国の山河をこの目で見たときは、涙々で全員で「万歳」を絶叫した。

今あのとときのわが子は四十五歳、平和な日々を過ごしている。しかし、今でも船上から水葬しなければならなかったあのお母さんの断腸の叫び声が耳から離れない。それに、引揚げ仲間が一人、二人と亡くなり、心さびしい限りである。

さいわいにも、主人は七十五歳ながら元気で働いている。この平和が永遠に続くようにと心から願う昨今である。

## 弟を失い、北支より

愛知県 小沢 三千江

昭和十五年頃私の父（信義）は東邦電力（今の中部電力）に勤務しておりました。上役の方からのすいせんとすすめがありまして、電気の技術者として是非にこのこ

とで北支へ三十六歳で派遣されました。そのとき私は小学校の一年生で、兄は三つ上の四年生でした。友達から支那へ行く「シナ」ナシへ行くといやかされたことをきのうのようにおぼえております。

父は、一足先に北支へ渡り、母と兄と私は一大決心をして、学校の手続き、予防注射等々、いろいろのこまかい手続きをして後から北支（張家口）へ渡りました。

父が口ぐせのように言っていた言葉を思い出します。

「外地で一旗あげて、内地へ帰りたい」と大きな夢を持っておりました。私は北支へ着くなり水と環境の変化に順応できず「百日咳」にかかり、小学校一年の二学期、三学期を休学し、母にとても苦勞をかけました。その母は今ではなく（終戦の苦勞がもとで）涙の出る思いがこみ上げます。でもあちらでの生活は「水力発電所」の所長ということで、とても恵まれた暮らしでした。日本人ばかりの社宅に入り、まわりは鉄条網にはりめぐらされ、門衛がいて、開門と同時に馬車で買物に出かけたものです。毎日百人ぐらいのクーリー（支那人の夫）さん達が入りを出してました。

兄はこちらに中学校がなく、五年生の時に内地に帰り、親せきの家に預けられました。

終戦の時、父は包頭に単身赴任しており、私達母と子と、父とは別に引揚げてまいりました。終戦から半年間の長い長い引揚げの苦勞が始まりました。真夏に着のみ着のまま手には持てるだけの荷物を持ち、途中で冬になり、軍隊の毛布をもらい、洋服を作り、寒さをしのぎました。食事はというと一日二食、軍隊の金の食器に軽く一杯だけ、とてもひどい思いをし、支那人の所へ物々交換でマン頭ととりかえ、飢えをしのいだものです。その間、大勢の栄養失調、はやり目、頭の髪にはシラミが湧き、次から次へと広まり、地獄のさたでありました。娘さんは男装に身を固め、進駐軍から身を守ってました。病気で毎日死亡人がたえず、畑に穴を掘って遺骸を埋め、まさに生き地獄でした。母は一番下の弟を昭和十一年に出産し、産後の肥だちが悪く、病院列車で送られ、私は弟をおんぶして妹の手をひき、破壊された鉄橋の川原道の石のコロコロした所をみんなに遅れないように必死で歩いてついてゆきました。私は父を探し求め、天津

で奇蹟的にめぐり会い、その父の姿たるやボロボロの服にリュック一つを背負っていました。天津から船に乗り、鉄板の上に毛布一枚敷いただけで内地へ帰ることの喜びをかみしめていました。長い長い列を作り乗船し、母の背から子どもをおろしたとき、子どもはすでに死亡していました。ある悲しそうな母親の顔が四十五年たった今でも私の脳裏にやきついていきます。昭和二十一年二月、佐世保に上陸。DDTを頭の前から足の先までふきかけられ、みんなそれぞれの郷里へ向かいました。父は四十二歳、妻と私達子ども四人をかかえて生きてゆかねばならない。父が今まででどれだけ心身共に苦勞に苦勞を重ね、たえがきたを耐えて生きてこられたかを私は見ている。(言葉では表しようがない)現在は電気工事店で生活を支えています。父は現在八十七歳で眼底出血、私(五十六歳)が代筆しました。

## 大連十八年、北京一年の青春

大阪府 青木 彌生

昭和二十年八月十五日正午、北京西城第一国民学校四年女子組の子どもたちとラジオの前で起立して終戦の詔勅。内容がつかめず、教師たちが集合して、戦争終結が理解でき、みんなで、ぼう然として泣いていた。ここは天安門のすぐ傍で、日本人子女千二百人ほどの学習の場であった。

ポツダム宣言受諾、無条件降伏となれば、今後どうなるか、不安はかくせず、勝つことを信じて今日まできたのだからなおさらだった。

玄関の所で日本の若い憲兵が号泣しているのを見たのが今も印象に残っている。学校から徒歩で四十分の所の延年胡同という街に、華北交通の杜宅があって、塀が高く、厳重な警戒の中での生活となった。学校へは残務整理のために出勤し、毎日は、校内外の整備や書類の焼却